

信友

信友会事務局

東京都新宿区高田馬場
3丁目45-4
電話 03-5330-1192 (代)

主な記事

- 2面…通信団長
通信電子課長
- 3面…通信電子部長
陸上自衛隊通信電子の現況
- 4面…東日本大震災活躍状況
- 6面…大河原三平先生ご逝去

全国通信科部隊の活躍に敬意と感謝！(四、五面)

— 東日本大震災災害派遣 —

本年の総会・合同歓送迎会は二月十九日(日)に実施

第四十七回信友会総会・合同歓送迎会(懇親会)は平成二十三年二月二十六日(土)、第一ホテル東京において盛大に行われました。十一時十分の陸幕通信電子課長講話から始まり、十一時三十分から行われた総会では、平成二十二年事業報告及び平成二十三年事業計画等が審議了承されました。

その後、十二時から、信友会・現役合同の歓送迎会(懇親会)が行われました。

参加者は信友会百九名、現役通信科隊員の方々百四十



合同歓送迎会風景



西方地区懇親会記念撮影

西方地区懇親会実施

信友会の地方懇親会は、毎年、方面通信群の記念行事祝賀会食の場をお借りして行っています。

平成二十三年は、西方方面通信群記念行事に併せて二月二十七日(日)に熊本日空ホテルニュースカイにおいて開催されました。西方地区信友会員の皆様と信友会副会長以下役員が参加し、和気あいあいとしたムードの中、旧交を温め、昔話に花が咲いておりました。

本年の地方懇親会は、北方方面通信群記念行事に併せて行います。多数の会員の皆様の来場をお願いします。

防衛力の精度

会長 行徳浩志



信友会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。

三月十一日の未曾有の大災害において、信友会員の皆様は被災状況をお聞きしたところ、回答のあった方だけでも約四十名の方が被災されたとお聞きいたしました。心よりお見舞い申し上げます。

さてこの大災害において、自衛隊は初めての本格的統合部隊を編成し、十万人規模の部隊を運用しての人命救助に当たりました。結果としては、これまでになく人命救助作戦から応急復旧作戦が実施されて大きな成果を上げることが出来たことを自衛隊のOBとして誇りに思うしいです。

改めて今回の災害派遣を振り返ってみますと、自衛隊らしいといえはそれまでですが、具体的な事前の計画の無い所に、十万人もの部隊を急速に展開し、整齊と災害派遣任務を達成した組織力を再認識いたしました。もちろん、ただ行動するだけでなく、全てのインフラが壊滅状態の災害地域で、効率良く如何にたくさんの方の命を救助するかが問われるなか十分に任務達成できた、多くのマスコミ等から無償に受けておりました。

これまでも自衛隊は災害派遣では、阪神大震災での活動で評価を受けましたが、PKOでもカンボジアのPKO派遣以来、幾多のPKOを世界に派遣して世界から評価を受け続けています。

なぜ自衛隊は半世紀以上戦争を経験することなく、ほぼ訓練のみでその精度を維持し、かつ高い士気を維持している、かつて歴史に存在したことがない軍隊でありえるのでしょうか。

各国の軍隊の歴史を見てみますと、長い期間戦争が無いと、規律の維持が困難になり、自己崩壊を起こすか、政争の具として使用されるかして組織崩壊を招いていきます。

なぜ自衛隊は崩壊せずに高い士気と精度を維持できているのかを今回の大震災での活躍を目の当たりにして改めて考えさせられました。

軍隊は、人命の救助や国の存亡をかけた緊迫した場面で運用されるのが宿命で、必ず要求される成果を求められ続けます。

そこで、各々の場面で成果を達成する力を「防衛力の精度」と表現すれば、これまでの自衛隊は精度の高い組織であると言えるのではないのでしょうか。

- 私見ですが、防衛力の精度は
- 部隊を運用する力、
- 命令を執行するための理解力、技術力や体力を有する個々の隊員の力

○ 保有している装備品等の質の高さ

等で構成されていると定義すると、今回の大災害での活動やこれまでの六十有余年の自衛隊の活動(PKO、対海上行動(北朝鮮対応)、領空侵犯対処、国際緊急援助隊やその他の大規模災害対応等)を見てみると、二つの要素である、「○部隊を運用する力」、「○命令を執行するための理解力や技術力や体力を有する個々の隊員の力」、は所要の精度を十分に保持していることがわかります。

一方「○保有している装備品等の質の高さ」はどうでしょうか。

幸いなことにこれまではPKFや本格的な武力侵襲への対応を求められることが無かったため、保有している装備品等の質については実戦の場での評価は受けてはいません。

人の育成はこれまでも、またこれからも、時代の変化に対応しつつ、そのノウハウを受け継ぎながら、自衛隊は練成し続けていくことでしょう。

しかし装備品等の質に関しては、防衛予算が減少する中、世界一流の装備品の質を維持していくことが出来るのでしょうか。

自衛隊が装備品の質を維持して世界一流の軍隊として今後もあり続けるには、現役だけでなく、われわれOBに何が出来たのか、自らに問いかけてみる必要があるのではないのでしょうか。

旧陸軍の兵器の質が問われた「ノモンハン事件」を二度と起こさないために、信友会の会員の皆様のご支援をお願いします。

48周年総会・懇親会

信友会四十八周年記念の総会及び懇親会を左記のとおり実施します。

年一度の懇親の場です。是非ともご出席いただき、同期・先輩等会員相互はもちろんです、若々しい現役とも懇親の笑をあげて頂きますようお願い致します。

今回も前回同様、陸幕通信電子課長の講話を頂くよう計画しております。

一 日時 平成二十四年二月十九日(日) 十一時
一〇分より

(一) 総会 十一時〇〇分～十一時五〇分
(二) 懇親会 十一時五〇分～十四時〇〇分

二 場所 第一ホテル東京(前年と同じ)
新橋駅から徒歩一分
(JR・銀座線・浅草線)

三 会費 九、〇〇〇円(当日受付にて頂きます)
【お願い】
出欠については同封のものがきで返信ください。

ユーザーへの三意 (熱意・創意・誠意) ある対応 ― わかりやすさと単純さの追求 ―

通信団長 陸将補 小林 英彦



信友会の皆様! 通信団への常日頃からのご支援ご協力、誠にありがとうございます。この紙面をおかりして、まずは心より厚くお礼申し上げます。

さて、私が通信団長に上番して以来、早くも二年近くが経過していますが、くしくも今、陸上自衛隊の通信は、新野外通信システム、業務システムという従来の大きなアイテムへの移行時期を迎えております。そしてやはり心配なことはこの両システムが真にユーザーのことを考えたシステムになっているかどうか、ということです。言い換えれば、予算の制約があるにもかかわらず、ユーザーが欲しいものない価格が高く無駄なものが入り込められていないか? 使用できてユーザーにわかりやすく負担がかかりすぎるものではないか? 従来よりも良くなったことをユーザーとして本当に実感できるものなのか等……。あらためて実用試験支援等を通じて、これらのことをしっかり確認しなければならぬと思いついた一年近くでもありました。

通信団長上番時、表題にある「ユーザーへの三意(熱意・創意・誠意)ある対応」という統率方針・要望事項を通信団隊員に示し、支援部隊隊員として真にユーザーの視点にたったわかりやすい通信支援を行うことを各自の心の指標とするよう要望してきました。当たり前のことですが、ユーザーのことを考えない通信組織の構成、維持、運営というのはありえません。確かに高度情報・通信技術は進歩・複雑化し、新たな専門用語が日々生まれてくる時代ですから、通信科職種はこれに適応し技術的な専門性を磨き通信のプロでなければならぬというのはよくわかります。しかしそれとユーザーへの対応とは別だと思えます。ユーザーへは一般的な視点にたつたわかりやすさと単純さを追求した通信でなければならぬのです。なぜなら陸自全般が低充足で多様な任務に就く中、通信確保のために部隊隊員に難しい専門的かつ複雑な業務をせよ、システムの維持管理等に部隊の多くの隊員をさかなければならぬようでは、部隊の負担が増すだけで、新しいシステムにする意味すらないのです。さらに種々のユーザーへの説明に関しても驚く

ような例が散見されます。とある担当者の説明ですが、聞き耳をたてていると他職種のユーザー部隊隊員に対しても難しいアルファベットの専門用語を乱発し、まるで〇〇学会での学者の発表のようです。自分自身は非常に良くわかっているつもりなのでしょうが、専門外の人にはまったく理解できません。そしてその説明相手に対して「当然きみもこのくらいのことわかってるよな」的な冷たい態度を示すこともあります。やはり他職種のユーザーに理解されない自己満足の説明では結局「おたく・マニア」の世界でしかないと思うのです。逆にこういつた専門おたくに「DICSって何?」などと尋ねると……。大抵は通信団長がそんな基本的なこととも知らないのか。といった顔をします。そして「師団通信システム、Division Integrated Communication Systemの略号ですよ」と私は暇じゃないんですといわんばかりのあからさまな態度を示しながら、団長だからしつこく答えてやったといった感じでした。「じゃー、民間の一般人にも通じる略号かどうか?」(DICS(鉄道)じゃDICSを何というのか?) などと言いつつ返すもまったく返答がありません。JFではディーゼル車情報制御装置(Diesel Information Control System)のこと、陸自の化学学校や、特殊武器防護隊等の化学職種の隊員は除染剤DICS(Sodium Dichloroisocyanurate ジクロロイソシアヌレートソーダ)と答えるということにはまったく知らないのです。

この例は極端な例かもしれませんが、DICSとていつも師団通信システムが唯一で、その他はまったく考慮がないといった、おたくの世界から抜け出せないところがあるのです。職種の代表的存在である通信団長の私がかんなことを書いて現職通信科隊員のみならず〇〇からしかれそうなお内容ではありますが、要は通信の常識が常識でなく、見方をもっと一般にひろげようわかりやすく単純な通信をめざさなければならぬ時代に突入しているということを言いたいのです。

最後に幹部自衛官にMDは何の略号か?と聞いてみてください。機械化師団(Mechanized Division)、防衛医科大出身者(Medical Doctor)ミサイルディフェンス(Missile Defence)など答えたら重傷だといってください。

一般的にミュージックディスク(Music Disk)、ミニディスク(Mini-Disk)、マグナムドライブ(発泡酒)と答える幹部に期待してください。専門おたく的な見方に凝り固まることなく、今、通信団は「ユーザーへの三意(熱意・創意・誠意)ある対応」のもと一丸となって新野外通信システムの実用試験・業務システムの導入を支援しているところであります。今後とも信友会の皆様のご支援・ご協力のほどをよろしくお願いいたします。

通 心

通信電子課長 一等陸佐 馬場 清美



信友会の皆様には、常日頃から心温まるご指導・ご鞭撻を賜り心から感謝と御礼を申し上げます。さて、一昨年十二月に

「平成二十三年以降に

係わる防衛計画の大綱」と「中期防衛力整備計画(平成二十三年度〜平成二十七年年度)」が策定され、その具体化・実現に向け「防衛力の構造改革推進委員会」等の枠組みで検討が進められている状況です。その中の陸自通信電子関連の主要内容としては、情報通信ネットワークの整備として新野外通信システムの整備、防衛分野での宇宙利用促進にも資する高機能なXバンド衛星通信網の構築、サイバー攻撃への対処態勢及び対処能力の総合的な強化等、いずれも今後の陸自通信電子システムの中核に位置付けられる重要なものであり、関係部署と連携を図りつつ業務に取り組んでおります。(細部は、本紙三頁「陸上自衛隊通信電子の現況 陸幕通信電子課」で紹介していますのでご覧下さい。)

一方、防衛予算の影響や装備品の高性能化・高価格化による調達数量の減少から、防衛装備関連の研究部門や製造部門を維持する困難性の増大や装備取得の一層の効率化を図るため、防衛生産・技術基盤の維持・育成に向けた取り組みとして、省内に部外有識者による研究会が実施されております。この中では「選択と集中」の実現により、安定的かつ中期的な防衛力の維持・整備を行うため、防衛生産・技術基盤に関する戦略を策定するとしています。

更には、昨年三月の東日本大震災時の災害派遣活動における通信電子システム関連では、部隊展開後の通信能力の強化、各自衛隊間や関係機関との現場における情報共有手段の整備、民間通信事業者との連携の維持・強化等、多くの貴重な教訓を得て、これらを逐次、事業等に

反映している状況です。

このように陸自通信電子システム分野の大きな変換点を迎えており、この時期に実際に業務に携わる立場にある重大さを認識し、しっかりと将来を見据えて着実に実現していかなければとの強い決意で業務に取り組んでいます。

先日、ある新聞で東日本大震災における災害派遣活動を紹介した、「常時必通」の信念貫く」との見出し記事が目にとまりました。被災者の目に触れることはなく、厳しい環境の山上で長期間にわたり無線中継任務を黙々と遂行した陸自通信科隊員が、その活動状況・所感を述べた内容であり、その心意気に対し熱いものを覚ええました。

自らを顧みると、通信科隊員として初めての教育であった幹部初級課程で「必通の信念」、「通信は、まず相互の心の疎通から」ということを学び、以来、様々な場面で幾度となく意識することがありましたが、通信科職種を取り巻く環境が大きな変革期を迎えているこの時期、このふたつ言葉を通信科隊員全員が強く再認識・意識して職務に取り組むことが大事ではないかと思えます。そしてこのふたつ言葉の核となるのは、一人一人の「陸自通信電子に対する情熱と誇り」ではないかと感じています。

「陸自通信電子に対する情熱と誇り」という共通の心が、通信科部隊及び隊員相互の連帯感や同結心の強化、そして組織全体の活力となっており、併せて、「人が戦力であり、組織の基本を人とする陸自」にあって、先輩が後輩を育てるという貴重な組織風土の醸成においても、この共通の心が寄与している部分は大きいと感じます。

更には、この共通の心を介して信友会の皆様と現役隊員とのつながり・交流が意義深いものとなっている場面をこれまで多く経験し感謝している所でもあります。

社会における情報通信技術の進展は目覚ましく、また、自衛隊の統合運用体制移行五年が経過し、通信電子システムの果たすべき役割が今後益々重要になることが予想される中、信友会の皆様には、引き続き、幅広い観点からのご助言・ご意見を頂けることをお願い申し上げます。とさせていただきます。

東日本大震災災害派遣支援を 振り返って

通信電子部長 一等陸佐 秋山 賢司



信友会の皆様には、常日頃からご指導、ご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

また、昨年は、東日本大震災災害派遣の支援におきましても、さまざまな激励、ご支援及びご協力を頂き、紙面をお借りして重ねて御礼申し上げますとともに、補給通電部としての活動の一端をご紹介します。

あの大地震が起きた時、私は部長室にいましたが、強く長い揺れから直感したのは、「大規模な災害派遣になる」ということでした。時間の経過とともに状況が逐次判明してきましたが、岩手県、宮城県、福島県等に地震とその後の津波で甚大な被害が発生するとともに、福島県原発にも被害が出ており、陸上自衛隊としては、中央即応集団、師団、旅団等が次々に東北へ派遣されることとなりました。さらに、霞ヶ浦駐屯地の関東補給処も被災し、自動車庫が使用不能という一報も入ってきました。このため、通信電子部としては、部隊のニーズにタイムリーに応えるため、部隊運用、通信運用等の情報収集を継続しつつ、関東補給処通信電子部倉庫の保管状況、各補給処における主要通信器材の整備用品等の在庫状況を把握するとともに、緊急調達物品の把握と経費の可能性の検討、部隊運用に際する補給品の追送要領の検討等を進めました。じ、陸幕、関東補給処等と連携しつつ、部隊のニーズに応じて補給指示の発出、緊急調達要求等を行いました。

災害派遣において、部隊が行方不明者の捜索等、野外で行動するには、電源として乾電池が必要ですが、防衛専用電池は調達リードタイムが長いという特性があり、市販乾電池についても、種類によっては平時の所要がほとんどないことと民需との競合という特性があります。今回は各補給処の在庫状況を日々細かく把握し、それに基づき偏在調整(管理換え)、緊急調達等により、在庫

が枯渇して部隊行動に支障が出るということはありませんでした。今後、防衛専用電池については、調達リードタイムと派遣隊力に際する適正な在庫数を検討するとともに、その在庫統制要領を検討する必要があると思います。市販乾電池についても、種類ごとに消費期限や平時の消費量を考慮した在庫統制要領等を検討するとともに、災害発生時等に防衛省が優先して調達できる枠組み等の検討が必要であると思います。

また、東日本大震災災害派遣においては、79式、DICS、DICS(改)の3世代の通信システムが展開し、多数の電子交換装置、搬送端局装置等が運用されるとともに、災害派遣活動が長期にわたったため、通信電子器材の故障も多く発生しました。部品の補給実績から見ると、長期間の連続運用によるものと思われ、発動発電機の部品が半数を超えたとともに、その定期交換部品がかなりの割合を占めていました。円滑な派遣活動のためには、通信組織の常統的な維持運営が重要ですが、そのためには電源の確保が不可欠であり、今回は予備器材を運用する等の処置、部品の緊急調達等による対応により、発動発電機の不可動に起因する通信の途絶は防止できたものと思います。補給通電部としては、これまでも即時補給率向上のため、保管品目及びその数量については、増勢、後退等の区分、特異事項の有無等を検討の上、設定してきましたが、今後は例えば、発動発電機の定期交換部品についても、その保管場所、数量、管理要領等、保管品目としての設定要領等を検討する必要があると思います。

今回、ご紹介したのは、部隊が活動するために必要な「電源」に関してのことですが、東日本大震災災害派遣を通じて得られた教訓等に関しては、今後、国家レベルで対応すべきことから、陸上自衛隊として処置すべきこと、個人の準備と心構えのレベルまで様々なことがあると思います。ただ、今回の災害派遣支援を通じて再確認されたのは、当たり前のことですが、速やかに物を準備し、絶え間なく部隊に送り届けることの重要性でした。補給通電部としても、係る観点から平素の準備を怠らず、災害等の発生に当たっては、遅滞なく部隊の支援ができるよう、万全の態勢を取るために今後とも努力していく所存ですので、引き続きご指導、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

陸上自衛隊通信電子の現況

はじめに

防衛省・自衛隊は、平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災において、震災直後より、情報収集、人命救助等迅速な初動対応を実施したほか、十万人規模の統合任務部隊を編成し、自衛隊の総力を挙げて対応しました。通信関係部隊においては、全国の陸上自衛隊・海上自衛隊・航空自衛隊等の通信力を統合任務部隊指揮官の指揮の下、一元的に運用し、本活動の基盤たる通信システムを構成しました。

一方、平成二十二年十二月に策定された防衛大綱・中期防衛力整備計画においては、「統合の強化」「情報能力の強化」「科学技術の発展への対応」等が体制整備の重視事項と位置づけられ、特に、高度な指揮通信システムや情報通信ネットワークを整備することにより、確実な指揮命令と迅速な情報共有を確保するとともに、サイバー攻撃対処を統合的に実施する体制を整備することと明記されました。

また、防衛生産・技術基盤の維持・育成の面では、防衛生産・技術基盤が我が国の防衛を支える重要な役割を果たしていることを改めて認識する一方、昨今の厳しい財政事情や安全保障上の重要性並びに国内産業の競争力強化の観点から、国内に保持すべき重要な防衛生産・技術基盤を特定し、その分野の維持・育成に力を注ぎさせる必要がある(「選択」と「集中」)ことなどの方向性が示されました。

このような環境の中、将来の通信体制を見据えつつ、陸上自衛隊通信電子・システム分野の発展・充実のため、通信電子課一同、日々の業務に取り組んでおります。

二 主要通信電子器材等の整備
平成二十三年度は、方面隊電子交換システム(中部方面隊、師団通信システム(改)、第十三旅団)、野戦無線機(第十三旅団、西方直轄部隊)等が逐次部隊に納入されます。

本年度予算要求の新規装備品である「新野外通信システム」は、現有方面隊電子交換システム、師団通信システム及び各種機能別無線機の後継として、方面隊、師団等に整備する予定です。本システムは、IP(インターネット・プロトコル)技術等の民生技術やソフトウェア無線技術を活用することにより、多様な事態に迅速・柔軟に対応できる野外における共通情報通信基盤を提供するものであり、平成二十二年から実用試験が行われています。現在、陸幕内の関係部署をはじめ、関係部隊及び機関等の協力のもと「新野外通信システムプロジェクトチーム」により運用・編成特長・教育訓練・補給整備等について引き続き検討しているところです。

また、本年度の主要な固定システム関連事業として、西部方面隊の方面隊指揮システム、各方面隊の指揮管理通信システムの換装があります。

陸幕通信電子課

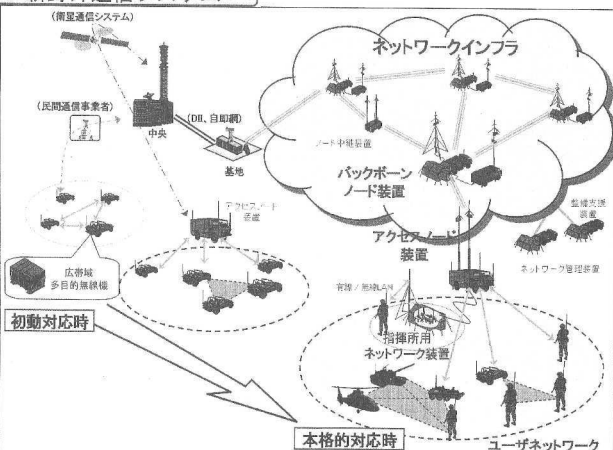
一方、平成二十三年年度補正予算では、東日本大震災により陸上自衛隊の建物や器材などが被害を受けたため、これらの復旧に必要な経費、使用不能となった装備品・器材等を補填するための経費、災害派遣活動を継続する上で必要な経費、災害派遣活動をより効果的に実施するために必要な装備品・器材等を維持・整備するための経費を確保しました。

(一) 陸自部隊の新・改編
平成二十二年年度の新・改編部隊として、第一師団、第二師団が近代化改編され、北方及び東方に混成団が新編されました。また、旅団の機能強化として第五旅団が改編されました。

(二) 陸自通信部隊の改編
第五旅団の改編に伴い第五通信中隊が、二等陸佐を指揮官とする第五通信隊に改編されました。

四 おわりに
「防衛力の実効性向上のための構造改革」における検討結果が、平成二十三年八月に大臣に報告されました。今後は改革ロードマップに則り、更なる検討課題の解決に向け継続的かつ計画的に取り組んで改革のフォローアップに協力するとともに、将来のシステム通信に大きく関わる「新野外通信システム」等の事業を推進し、あらゆる任務に対応する陸上自衛隊通信電子・システム分野の充実発展に日々努力して参る所存ですので、信友会の皆様のお一層のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

新野外通信システム



東日本大震災活動状況

東日本大震災通信屋奮戦記



一 初めに

平成二十三年三月十一日
午後二時四十六分五秒、
地球が鳴動した。大きくゆっ
くりとした揺れは、地球は
やはり表層部の地殻は固い
が、その下部は柔らかいマン
トルなのだということを五
体で感じた。二日前に起きた
震度五弱の地震は、この地
震の前触れだったのだと確
信した。数分の揺れの後、全
ての電気が止まり、水道、ガ
スも止まった。

二 初動通信を確保せよ!

三年前に宮城岩手内陸地震を経験した東北方面隊は、地方自治体を巻き込み数度に及ぶ実動訓練と指揮所訓練を繰り返していたので、宮城県及び岩手県における初動の通信は円滑に確保できたと言いたいところではあるが、普段は車で三十分もかからない宮城県庁に県庁合通小隊が到着したのは七時間後のことだった。後に小隊長から「道路は、大渋滞になってしまし通信車両は全く進まなかった。」と報告された。しかし、当日の午後十一時頃には、当面の初動の通信を確保した。また、日頃の訓練の成果により、それぞれの合通小隊や中継組が現地到着後は極めて円滑に計画に示された通信組織を構築することができた。しかし、事態は宮城沖地震の想定を遥かに凌駕した大震災であり、北は北海道から南は関東地方にまで被害が及んでいるとの情報が逐次に明らかになっていった。

三 世界が注目した映像

「こちらは映像伝送機です。名取市上空において撮影中です。あっ!津波が何波にもわたって海岸に押し寄せています。うわ!これはひどい!」東京放送アカデミーの研修を終えている生え抜きの映像伝送隊員山元二曹は、総理大臣官邸にも配信されている映像伝送機の中でマイクスイッチを切るのも忘れてうめき声をあげた。上空から見た衝撃的な光景は、彼を狼狽させる凄まじいものだった。何波にもわたって海岸に押し寄せる津波を上空から撮影したのは、我が東北方面通信群映像写真小隊が世界で初めてのことだった。彼らは事後、数々の取材を受けることになる。テレビにおいて、この映像

前東北方面通信群長 一等陸佐 島末 真

四 各駐屯地の通信が次々に途絶!

震災後、直ちに首脳大臣は自衛隊十万人体制で空前絶後の災害派遣活動を行うと発表した。全国の自衛隊に直ちに出勤命令が下され、部隊の大移動が開始された。仙仙周辺の各駐屯地は増援部隊の当面の前進目標とされ、部隊が統々と大和や船岡駐屯地等に集結した。そのような緊要な時期に各駐屯地で利用していたN-TT回線の接続回線が、震災後、一日から数日の間に次々にダウンしていった。携帯電話も全く通じなくなっていた。後から原因を探ったところ、N-TT局舎の自家発電機の燃料が無くなってしまったためであった。N-TTの通信局舎は停電になると自家発電機を回し当面の電気を確保する。しかし、自衛隊の防衛マイクロ通信局舎が長期の燃料の備蓄があるのに対し、N-TTの各局舎にはそれだけの燃料備蓄は無い。災害発生時は、自社の非常用電源車を所望の局舎に前進させ電気を確保する計画であったが、このような大規模な災害においては対処のしようがなかった。また防衛マイクロ回線も一部区間が工事中であったため、ある通信所以南の通信が途絶した。司令部の主要な幕僚から「何度電話しても市ヶ谷につながらない」との苦情が寄せられた。やはり自営のマイクロ回線が主要な司令部門には必要なのだ確認した。主要な駐屯地までの通信は中央野外通信群の重機部隊を含む必要の野外通信部隊で確保した。

五 J400C開始

震災翌日の三月十二日、一通のメールが通信学校長から寄せられた。「未曾有の災害に対し、全陸上自衛隊の通信隊員を使うことに遠慮してはいけません。(中略)遠慮せずに大砲を振るいなさい。ちなみに増加募集が欲しかったら、卒業式を終えぶらぶらしているF40Cがいる。東北出身の教官もいる。右のような強いメールがあった。このように中では三月十四日には、災害派遣において史上初めて災害統合任務部隊が編成されることになった。通信学校、通信団、陸幕、統幕等主要な部隊・機関の支援を受け、統合指揮通信システム運用調整所(J400C: Joint C4 Operations Coordination Center)

を編成するとともに陸上自衛隊のみならず、海空自衛隊の移動通信部隊の支援も得られるよう積極的に調整を開始した。小職が、中央に電話をお願いすれば次の日には部隊、器材、人材が仙仙に到着した。正にオールジャパンによる通信の全力の戦いが始まった瞬間であった。特にJ400Cに來た初代所長の統幕指揮通信システム運用班長である木下一佐及び通信学校幹部特修課程を卒業したての四天王である森重三佐、佐藤三佐、杉本三佐及び内田一尉が獅子奮迅の活躍をした。平時の総監部通信班及び群本部三科であれば数日の調整を要するに構築できなかったような通信組織があったという間に調整して作っていく。また、情報共有のために陸自指揮システムを各連隊長まで延伸した。そのため二五〇台におよぶ端末を一夜で受け入れ、必要な設定をして、配分計画を作り、計画に基づき逐次システム回線を構成した。そのような調整を通信団から増援された安江一尉が中心になって基シ大ネットワーク運営隊の精鋭が実施してくれた。東北方面隊は約二年にわたってクロノロジー(*事象を時系列に人力・表示できる機能であり、設定されたグループによるリアルタイムの情報共有が可能な適用業務)による情報共有を訓練していたので、情報共有体制が構築されるや、第一線の部隊の活動状況が、上は統合幕僚長から下は第一線連隊長、地方協力本部長、各駐屯地業務隊長に至るまでリアルタイムに共有された。これも常日頃から音声系のみではなく、データ系のネットワークを野外通信器材等を活用して構築する訓練を継続していたお陰であった。また、全国からノウハウや技術者が仙仙に集結した。通信群長としてこの未曾有の災害派遣作戦の成功を確信した瞬間であった。

六 じゃじゃ馬ネットワークを乗りこなせ!

今回の音声系ネットワークは、三世代にわたる野外通信組織が基地通信組織にぶら下がる大規模な通信組織となった。派遣部隊は、幸いにもそれぞれの世代の通信が綺麗に配置され通信連係上の問題は生じなかった。後ほど通信システムの世代がうまく地域ごとに構築されました。」と報告したところ、大いに興味を示された。問題は、北方及び東北方等に整備されている器材のヒステリーであった。この器材は相手通信所交換機を自動認識する機能を保有しているため、小規模な通信組織では都合がよいのであるが、このように複雑膨大な通信組織を構成した場合、交換機同士が相手を確認しあう通信をするため、一般ユーザーのトラフィックを圧迫したヒステリー状況を呈することとなる。ヒステリーを起すした交換機はユーザーが電話しようとしてもむなしくビジートーン(話中音)を返すばかりとなる。我々はこの音声系ネットワークを「じゃじゃ馬ネットワーク」と呼称した。この

問題を解決するためJ400Cの面々や通信学校の技術教官、メーカーの方々が大活躍してくれた。じきにこのようなヒステリー症状は改善していった。また、基地野外連係についても工夫をして派遣元方面隊の中継交換機まで中継線を延ばし仙仙や三沢の中継交換機へのトラフィックの集中を回避することができた。また、阪神淡路大震災で苦労した周波数運用についてもJ400Cに周波数調整班を編成し、周波数運用を効率的に実施するとともに統幕と一体となって所要の増加申請を実施し通信を確保した。

七 ウィルスバスター隊始動

先に紹介したデータ系ネットワークを音声系ネットワークと同規模の大きなものにしたため第一線部隊への情報保証に対するケアが心配となった。第一線部隊においてウィルス事案が発生した場合、最悪の場合、ネットワークが汚染され、せっかく構築したシステムが使用できなくなる。このためシステムに強い増強部隊を通信学校から呼び寄せ司令部情報部保全班に配属した。増強部隊である山田三佐(四月十九日以降は、東北方面通信群本部中隊長として上番することになる。)は、仙仙到着後直ちに所要の未然防止策及び被害局限のための計画を作成するとともにウィルスバスター隊を編成し、第一線部隊への情報保証に関する巡回指導を開始した。当初三件立て続けに発生したウィルス事案も、ウィルスバスター隊の活動開始後、ピタッと出なくなった。今後の通信組織の構成においてはシステムに依存すればするほど、システム構築と同時にサイバー戦の着意が必要となる。システム防護隊とも数次にわたってサイバー防護訓練を実施してきていたので、円滑にウィルスバスター作戦を遂行することができた。

八 終わりに

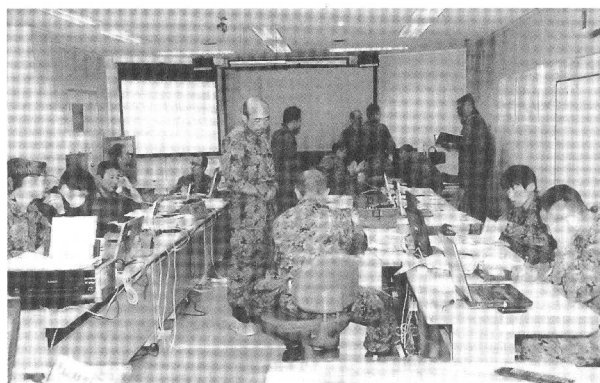
今回の作戦は、民間企業や海空自衛隊移動通信隊を含むオールジャパンの支援があったればこそ可能となっていたことを改めて強調したい。関係所掌の支援に対し心から感謝申し上げる。また、自ら被災し未だに家族の安否が分からない隊員や自宅等に被害を受けながらも歯を食いしばって任務を遂行してくれた東北方面通信群の隊員及び劣悪な状況下で長期にわたって支援を継続してくれた増援部隊の隊員に心から敬意と感謝を申し上げる。最後に本災害において尊い命を失われた犠牲者に対して心から哀悼の意を表するとともに、今も苦しんでおられる被災者のために、また、一日も早い復興を祈念し筆を置かせていただく。(一)

平成二十三年八月二日

全国から派遣された通信科部隊の活動状況



配属部隊を交え、連日の作戦会議(東北通群)



JTF-TH司令部におかれた統合指揮通信システム運用調整所(JC4 OCC)



上品山のノード幹線組(石巻市)(北方通群)



宮城県庁に展開(東北方通群)



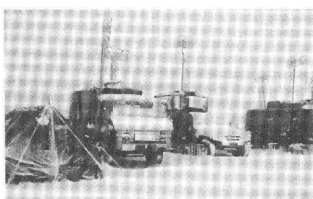
原発空撮から帰還したヘリ映伝空伝班機上クルー(東北方通群)



次郎太郎山に展開(宮城県)(東方向群)



福島県庁に展開する映像可搬局(中方向群)



上品山の中継(石巻市)(西方向群)



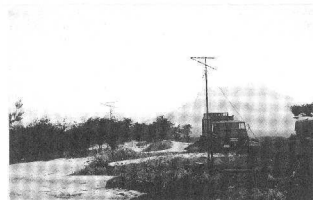
上品山中継所に開設した重搬(改)(石巻市)(中野方群)



行方不明者の捜索に当たる隊員(女川町)(1電隊)



空自松島基地で開設する隊員(通信教導隊)



岩手山中継所(1通大)



十二神山中継所(2通大)



給食支援中の隊員(岩沼市)(3通大)



徳仙丈山(4通大)



大草山無線中継所(5通隊)



指揮官幕僚ミーティング(仙台)(6通大)



被災地を撮影する写真班(7通大)



給水支援中の隊員(石巻市)(8通大)



今出山中継所(大船渡市)(9通大)



師団CP無線所の隊員(船岡)(10通大)



月山中継所(岩手県)(11通中)



有線構成する隊員(南相馬市)(12通中)



蓬田多重無線中継所(福島県)(13通中)



追波川運動公園の移動加入者基地局(女川)(14通中)



米軍機で移動する15旅団派遣部隊(嘉手納)(15通隊)

第二代信友会長

大河原三平先生ご逝去

大人逝く！

陸上自衛隊、就中通信科にとつての大河原先生のご功績を振り返りますと、四月四日大河原先生の訃報に接し最初「浮かんできた言葉が「大人逝く」だろうと思います。大河原先生についての御功績はすでに皆様ご存知のとおりであり、多くの方が信友会の機関紙やホームページに投稿されておりますので、個々のご功績を再度申し上げる事はいたしません。陸上自衛隊通信科の磐石の基礎を作られたと共に、今後通信科が進むべき方向を後輩に示していただいたことを申し上げ、このことに心から感謝の意を表したいと思います。なお皆さんご存じのこととは思いますが、信友会にとりまして、大河原先生が生みの親といっても過言ではないと諸先輩からお聞きいたしております。

七月二十八日上田愛彦先輩が起人代表で開催されました「故大河原三平先生を偲ぶ会」では大河原先生の活動の幅広さを象徴するかのよう、現役将官の方々や、通信科以外の方々の参加をいただき、しめやかにかつ和んだ雰囲気の中で実施されました。今回はその模様について特集を組ましていただきましたので、ご覧ください。

さて大河原先生は信友会の



機関紙に多くの書簡を寄せられております。その中で、機関紙第一号に寄せられた「辛口婆心」の中で、「お招きした「辛口婆心」の御健闘と共に若い者への諸々のフィードバックがうまく且つ密接に行なわれるよう、会に対してOBと現役の良い接点としての役割ををお願いしたい」と述べられており、今の信友会の役目を見事に示唆されていると感じます。その後も多くの投稿をされており、平成十六年二月一日に投稿された「不易と流行」が最後の投稿になっておりますが、その中で、旧軍が負けた原因の一つに技術に対する軽視であったことを述べられ、自衛隊が創設されてから一貫して技術重視の姿勢を貫かれたことを述べられており、最後に「ともあれ、皆さんは凡てを乗り越えて、複雑化して行くIT時代に、現実の敵と戦いながら広範多岐の任務遂行はまさに天晴れ。通信職種萬歳」と期待をこめて締めくくられております。(信友会ホームページをご覧ください。)

この頃、大学院派遣の門を叩く、さつき会の誕生に尽力(初代さつき会会長に就任)技術貸費学生制度及び国内留学制度の確立。昭和38年8月1日 通信団副団長有線ヘリ構成を検討・訓練、長距離有線構成昭和39年7月16日 陸上幕僚監部通信課長69式FM無線機、防衛庁専用回線を東京～大阪間に構成(TO回線：防衛マイクロ回線の前身)昭和43年3月18日 技術開発官(陸上担当)第2世代装備品の研究開発、61式戦車の国産化に尽力、74式戦車の研究開発昭和47年7月1日 退官退官後、退官記念講演会など情熱的に活動来賓祝辞もユーモアたっぷりな熱弁信友会会長として機関誌に寄稿、熱い思いが語られている。叙勲 昭和17年 勲五等瑞宝章(陸軍軍人として)昭和60年 勲三等瑞宝章○こよなく愛したピースと巨人、平成23年4月4日永眠

大河原先生を偲ぶ会の実施

平成二十三年七月二十八日、私学会館アルカディア市ヶ谷において「大河原三平先生を偲ぶ会」を開催いたしました。当日は、ご遺族三名のご参加を戴くとともに百名を超える出席者を得て、故人の御遺徳を偲びまた思い出を語り合い、厳かな中にも和気あいあいな雰囲気の中で故人にお別れをすることができました。

本会では、上田愛彦氏を起人代表とし、さつき会OB分科会、実験隊母隊会、信友会、関連企業等、大河原先生にゆかりの深い方々及び大河原先生の意志を引き継ぐ現役の方々にもご案内いたしました。

会では、入場時に参加者全員による献花を実施した後、起人代表の挨拶、故人の御経歴等の紹介VTRの放映、起人による故人を偲ぶ言葉、電報披露、献杯、歓談の順に進行され、最後にご遺族代表の津金澤様から御礼のお言葉を戴き締めくくられました。

終了後、参加された全員の方々が大河原先生の思い出にひたり帰路につかれておられました。世話人として準備させていただきました信友会、さつき会OB分科会といたしましても労が報われた思いでありました。本会にご参加・ご支援・ご協力を戴いた皆様方に対し心から御礼申し上げます。

大河原先生を悼む

起人代表 上田 愛彦

先輩各位たくさんいらっしゃって、大変僥倖ではあります。起人代表として一言ご挨拶申し上げます。

大河原先輩が九十五歳の天寿を全うされまして、間もなく四ヶ月が過ぎようとしております。先生の在りし日のお姿をもう一度思い浮かべてご遺徳を称え、残された数々の業績をお偲び申し上げる会はどうかとお取り致しましたところ、多数お集まり頂きありがとうございます。ご遺族の皆様にはお忙しい中ご参会を頂いております。また、本日この会を盛り上げるために、お名前は申し上げませんが多数のボランティアの方々にも活動して頂いております。ご苦勞様でした。

時は半世紀前に遡ります。昭和三十三年頃のお話ですが、大河原先生は「旧陸軍において日本の科学技術力は軽視されてきた」ということを度々申され、「陸上自衛隊においてはもっと。技術力というものを更に戦力化しなければ日本は駄目だ。」と日頃おっしゃっていました。中でも「人材の育成が一番大事で時間がかかる。」というところで、理工学部の外部研修、技術貸費学生、幹部候補生学校での技術的教育あるいは防大の理工学研究科等、いろいろなことをたどらなければならないが、実際に予算を執り事業として進められていたけれども、これが大河原先生をお慕い申し上げている重要な点かと思っております。

私自身のことを言っておしまいが、防大を出て翌年の昭和三十三年夏、これから大学院を受験するため、若手尉官三十六名が防大に集められ、大河原二佐(当時)の熱弁に聞き入っていました。正直のところ、みんな大学院なるものがよく分からなかった訳です。「受験に失敗したらどうなるのですか。」「防大一期は二期になる。」「全員騒然とする中ですが」「骨は拾ってやる。若いときからつまらないことを考えていないで、全力投球で突撃してやる。」ということ、辞退する者は降り、十一名がやるしかないという頑張り、合格に漕ぎつけたのでした。実にその時以来、先生のこのお言葉は今も、私の生涯を貫く座右の銘となっているのです。

当時、大河原先生が本当にお考えになっていたことは、ただ大学院に入ればよいというのではなく、そういう人材を多数育成して、日本の国家が潰れそうになっている時、陸上自衛隊はもろのこ、困難を乗り越えるため日本の技術力を結果的に進め、ということだと私は思っています。こうした先生のお考えは着実に成果を得ている訳ですが、古手は若い人に教育なり、指導なりを尽くし、老骨を乗り越えて尚一層の拡大を図ることが先生へのご恩返しに報いる唯一の道であることを再確認しているものです。一層のご指導を賜ればありがたいと思っております。

改めて大河原三平先生のご冥福をお祈り致します。



大河原先生を偲ぶ会

追悼 大河原先生

第四代信友会長 牛山 正吾 様



もう早く飲もうかなという人もいるかと思いますが、もう少しでございませうので、これもご供養と思って我慢して聞いてください。

私は牛山と申しまして、大河原さんとは実は現役中には面識がなく、昭和五十年に大河原さんが現役を終わられてから初めて会った者でございます。

初めてお会いした時も、ここに写真がありますけれども、大河原さんという方は会ったとたんこんな良い顔をするんですね。ここにいます通信科の人たちは、だいたい真面目な人が多いんですけど、大河原さんはまじめともにお会いした途端に何かいいことを話されて、大河原さんと話すと楽しいなという気持ちを相手に与えることができる人徳をもたれた非常に素晴らしい人であったと思います。

現役の私が大河原さんと話をした期間は、昭和五十年から昭和五十九年の約十年間位で、大宮の当時の横槍廻、市ヶ谷の幹部学校と陸幕勤務していた時で、もう一度大宮に通信補給処長としておりましたけれども、いつも話されている話題は大きく二つありました。

一つはゴルフの話で、大河原さんはゴルフはうまくなく私と同じヘタですが非常にゴルフをよくやりまして、その話をよく聞いておりました。

もう一つは女性のお孫さんが大好きで、その話をされながらよくにっこり笑っておりました。ここにおります上田さんが私の自衛隊の同期であり、しかも陸幕では、同時期に隣の課長(開発課長)で、しかも私が通信補給処長のときは通信学校長で非常にいい男であります。彼が現役を終わったあとに一時防衛大学におりましたので、彼は大河原さんの部下みたいなものですから、そのお孫さんをどうするか非常に苦労されたと思います。大河原さんは何とかしてお孫さんを防衛大学校に入校させ、実際に入ったんですけれども、残念がらわずか半年か一年ぐらいでやめて、その後東京工業大学に行ったと思います。

そういう今言ったようにゴルフの話と大好きだったお孫さんの話を本当に楽しそうにされる大先輩でございました。私はまだ孫がいないのですからそういう孫をもった大河原さんという人は、ここに出席されている多くの楽しい部下を持ち、とってもいい人生を送られたのではないかと思います。

ここにおります皆様方も何れ亡くなると思いますが、でも、どうか亡くなる時には何か一つか二つ楽しいことを残して人生をやっていただければいいなと思います。どうも大変話が長くなり、失礼致しました。

追悼 大河原先生

第六代信友会長 中里 義弘 様



多くの先輩各位がおられる中で、僭越ではありますがご指名でありますので一言ご挨拶いたします。

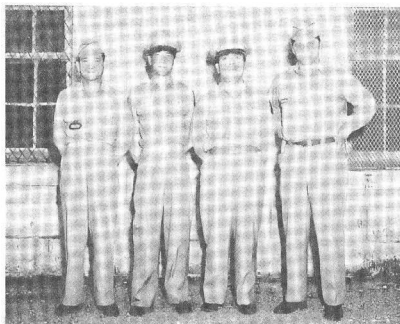
さつき会というのは先ほどのスライド説明にもありましたように昭和三十五年ぐらいから本格的に大学院の部外研修等が始まりまして、部外研修等を終えた人をさつき会員と称しまして、以降年々会員が増えてきました。現在ではもう千数百名という数になりました。現在ではさつき会の活動も現役とOBを分けてそれぞれ別々に切磋琢磨しようというような形で発展しております。私も大河原先生からその部外研修の仲間入りを命ぜられて、さつき会の会員となったわけでありました。

先生には技術開発官(陸上担当)の時に末端の班員としてお見えし、直接色々ご薫陶を受けました。そこでの勤務の時ではありませんが、私が技術開発官付になる前に第一研究所に勤務しており、その当時第一研究所では、潜った潜水艦を赤外線で見つけようと言うような研究を実施しておりました。実際のデータを収集するために下総基地で研究所勤務の陸上自衛官が三名ぐらいと技術の技官さんと一緒に実験をやっておりました。

そこに大河原先生が突然訪問され、われわれを激励されました。海上基地に陸の将官が入ってきて「皆さんご苦労様」という事で陸自に關係していい仕事をしている我々を直接激励されたことに私は大変びっくりしました。

そういう非常に幅の広いと言いますか、思いやりのある広い心を持った方だったと思います。当時そのような御姿を見まして、私も年取ったら果たしてこういう風な態度をできるかなというようなことを非常に考えさせられたことを今でも鮮明に記憶しております。

大河原先生の人となりの一端を簡単に紹介いたします。ご紹介し、偲ぶ会での挨拶とさせていただきます。



米陸軍通信学校入校



通信部隊小隊長時代(米国にて)



通信団副団長時、有線ヘリ構成視察



陸幕通電課長、軽搬送視察



通信団40周年記念行事

事務局だより

信友会事務局は二十三年度も会長・副会長の指導のもと年間五回の役員会を開催し、総会・合同歓送迎会業務を中心に会員の管理業務、機関紙作成等の業務を実施しました。また今年度は特に、東日本大震災対応並びに大河原先生を偲ぶ会支援の臨時役員会の開催及び行事開催支援等を実施しました。また信友会五十周年準備プロジェクトを立ち上げ、記念事業について検討を開始しました。

一 信友会総会・合同歓送迎会の開催
昨年度の第四十七回信友会総会及び通信科・信友会合同歓送迎会は、平成二十三年二月二十六日(土)に、信友会現役合わせて約二百五十名の参加を得て盛況に終了しました。

本年度は、第四十八回総会・合同歓送迎会を平成二十四年二月十九日(日)に、昨年と同じく「第一ホテル東京(新橋)」において開催する運びとなりました。会員皆様の多数のご参加を心からお待ち申し上げます。

二 東日本大震災への対応
平成二十三年三月の東日本大震災の大被害にあわれた東日本地区の四十名の信友会会員の方々に、行徳会長からのお見舞い状を出すとともに、家屋半壊以上の被害に遭われた六名の方々に慰金をお届けしました。

また、大震災で大活躍された派遣通信部隊員に対し、感謝と激励の趣旨を持って、菊池副会長から島末東北方面通信隊長(現システム防護隊長)に激励慰問品をお渡ししました。

三 「大河原三平氏を偲ぶ会」の支援

平成二十三年七月二十八日、アルカディア市ヶ谷において「大河原三平氏を偲ぶ会」の開催を支援しました。大河原先生は研究開発及び器材行政等の分野で活躍されました。当日はご遺族三名をはじめ、百名を超える出席者を得て、大河原先生を偲び、また思い出を語り合うことができました。

四 地区懇親会の開催

会員相互の親睦を目的とした地区懇親会を各方面通信群等のご支援を戴きながら行っております。

平成二十三年二月に西部方面通信群創立記念行事に併せて実施し、副会長以下役員を含め多くの方々が出席し懇親を深めました。

五 信友会ホームページ

信友会ホームページを開設して約五年が経過致しました。

今後とも記事の適時の掲載・更新に努めてまいりたいと考えておりますので、益々のご活用戴きますようお願い申し上げます。

六 信友会役員の紹介

信友会会長は平成二十三年度の総会で互選された行徳浩志氏が、福井孝三氏の後を受け、平成二十三年四月一日より職を執っております。現在の役員は次のとおりです。

【会長】 行徳浩志
【副会長】 菊池伯
【事務局長】 水口二平
【総務】 長 角和三郎
田辺睦廣・本田徹・門野利明・榎喜隆・梅田正敏・赤木教

【五十周年準備PJ】 長 *今井恵治
*上水俊哉・*佐藤秀守
*長 今村行雄
山根洋・今井恵治・石井智
長 草木迫彰
三浦義章・児玉忠三郎・小倉良太

【会計】 長 鮫島茂広
*宮崎礼二
【監事】 長 松浦学
村田和美(会計から転任)

【名簿】 長 草木迫彰
三浦義章・児玉忠三郎・小倉良太
【機関紙】 長 今村行雄
山根洋・今井恵治・石井智
長 草木迫彰
三浦義章・児玉忠三郎・小倉良太

【監事】 長 松浦学
村田和美(会計から転任)

【監事】 長 松浦学
村田和美(会計から転任)

平成23年度信友会会計報告
(H23.1.1~H23.12.31)

収 入	支 出
前 年 繰 越	4,953,560
経 身 会 費	220,000
通 信 等 事 務 費	112,000
利 子	192
第47回総会残余繰入等	16,730
以 下 余 白	
計	5,302,482
支 出	
会 費	154,000
郵 送 等 事 務 費	744,463
印 刷 費	505,983
原 稿 料	19,816
地 方 交 付	100,000
総 会 会 場 代	100,000
振 込 等 手 数 料	8,600
次 年 度 繰 越	3,669,620
計	5,302,482

以上のとおり報告します。

信友会会計幹事

平成23年12月31日

鮫島 茂広

宮崎 礼二

監査の結果、異常ありません。

信友会 監事

平成23年12月31日

松浦 学

村田 和美

ホームページ: <http://shinyukai.fc2web.com/>
Eメール: shinyukai@tune.ocn.ne.jp

『信友会五十周年』に向けて

信友会は、「会員相互の親睦」を目的として、昭和三十一年十一月五日に発足しました。その後充実発展を重ね、平成二十六年十一月五日をもって五十周年を迎えることとなります。こうして五十年の歴史と伝統を継承できますのも、歴代信友会会長をはじめ諸先輩並びに日頃から信友会にご理解を頂き、ご支援ご協力を下さる皆様あつてのことだと深く感謝致しております。

『信友会五十周年』に向けての取り組みは、信友会副会長を準備委員長として、五十周年プロジェクトチーム(長・今井恵治)を昨年十月に立ち上げて、構想検討を含めた準備を開始したところであります。

信友会誕生五十周年の大きな節目となる記念事業となることから、華美な一過性の記念事業ではなく、当会の目的であります「会員相互の親睦」を第一義の主旨としつつ、信友会の協力者も含めた「全員参加型」で、誰もが五十周年を迎える喜びを分かち合え、次なる五十年に託す熱い思いを表せるものにしていきたいと考えております。

今後内容を具体化し、総会・機関紙・信友会ホームページ等で逐次皆様にお知らせしてまいります。皆様、様々な形で参画をどうぞよろしくお願い致します。

合同歓送迎会 新入会員紹介

計報 謹んでご冥福をお祈り申し上げます
(H22.12.02~H23.12.01の承知分)

氏 名	逝去年月日	住 所
永田雄一郎	H20.01.17	東京都
久保田 茂	H20.06.	静岡県
甲斐 卓慈	H21.	熊本県
松村 謙造	H21.	京都府
伊藤 正康	H21.06.11	神奈川県
船見 治男	H21.12.17	神奈川県
田中 耕介	H22.	神奈川県
宮永 鐵郎	H22.02.08	熊本県
藤田 末雄	H22.03.02	埼玉県
鶴谷 好寛	H22.08.09	群馬県
折山 昭秋	H22.08.11	神奈川県
築山 榮次	H22.09.10	千葉県
柳山 太平	H22.09.14	千葉県
許斐 泰圭	H22.09.15	千葉県
菅野 英治	H22.11.09	東京都
藤田 和秀	H22.12.01	神奈川県
山田 勲	H22.12.13	東京都
大森 俊次	H22.12.19	東京都
寺山 三郎	H22.12.22	東京都
衣笠 勤二	H23.01.07	神奈川県
大河原 三平	H23.02.02	埼玉県
西方 勉	H23.04.04	東京都
寺崎 富雄	H23.04.17	東京都
三ツ矢 昭義	H23.04.22	神奈川県
弘中 一壽	H23.05.19	千葉県
上野 昭弘	H23.05.28	山口県
小島 忠	H23.06.07	千葉県
吉田 史郎	H23.07.09	東京都
吉田 史郎	H23.09.27	東京都
松本 米二郎	H23.11.15	埼玉県

平成23年叙勲おめでとうございます



瑞宝中綬章	室本弘道 氏	元技術開発官
瑞宝小綬章	佐々木勲 氏	元通信補給処長
瑞宝双光章	松永信幸 氏	元西方総監部通信器材班長
危険業務従事者	塚本 孝 氏	元通信学校2等陸尉
危険業務従事者	音響安雄 氏	元北方方面通信群2等陸尉



瑞宝小綬章	中村 晴 氏	元通信学校長
瑞宝小綬章	宮本芳昌 氏	元資材統制隊長

信友会新入会員名簿

(H22.12.02~H23.12.01)

氏 名	現住所	最終所属	退職年月日
鹿又 勝男	埼玉県	補給統制本部	H21.03.31
中田 保男	埼玉県	情報本部	H21.09.20
野口 克彦	東京都	16普通連	H22.12.05
中尾 福重	埼玉県	中基シ通隊	H22.12.08
坂本 孝博	熊本県	西方通群本部	H23.01.14
今村 健一	埼玉県	通信団本部	H23.01.18
宮崎 礼二	東京都	通信学校	H23.02.09
東海林 聡	埼玉県	通信団本部	H23.02.24
馬場 聡	千葉県	高射学校	H23.02.25
椿 宗義	宮城県	東北後支隊	H23.03.01
佐藤 秀守	神奈川県	通信学校	H23.03.10
上水 俊哉	埼玉県	九州補給処	H23.04.01
吉永 春雄	埼玉県	通信団本部	H23.04.01
越智 裕	埼玉県	通信団本部	H23.04.13
橋本 和也	埼玉県	中基シ通隊	H23.04.14
盛一 文嗣	東京都	通信団本部	H23.04.27
小倉 良太	埼玉県	通信団本部	H23.05.11
白石 人士	東京都	中央業務支援隊	H23.05.12
河田 稔	兵庫県	海田市業務隊	H23.08.01
荒 由美子	東京都	システム防護隊	H23.08.09
高橋 宏彰	東京都	通信団本部	H23.08.26